



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第32主日 C年(2022年11月6日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：マカバイ記二 7章1—2、9—14節

第二朗読：テサロニケの信徒への手紙二 2章16節—3章5節

福音朗読：ルカによる福音書 20章27—38節

神さまにとって生きている者

第一朗読の『マカバイ記二』には、マカバイ戦争(紀元前167-160年)とユダ・マカバイによるエルサレム奪回と神殿の清めを中心とする物語が記されています。

1節での「王」とはアンティオコス四世です。彼はユダヤ教を禁止しました。そして豚肉を食べるようにと「七人の兄弟」に強要します。しかし、続く2節に、「父祖伝来の律法に背くくらいなら、いつでも死ぬ用意はできている」と力強く宣言する兄弟たちは、豚肉を食べるのを拒否して殺されていきます。

9節の「永遠の新しい命へとよみがえらせてくださる」に注目してください。兄弟たちの信仰にあったのは「復活」への希望です。死んで陰府に降った人間はまさに陰のような命を生きるが、それは神さまとの関わりから切り離された命であって、神さまからの恵みをもはや期待できない。とするのが旧約聖書が示す死後のイメージです。しかし、イエスさまが登場するおよそ百年ほど前から、復活への希望がユダヤ教の中に生まれていきました。特に、律法を守るために、そしてユダヤ人としての民族の誇りを守るために殺された人々が神さまの恵みとは無関係にあるというのは受け入れがたかったのです。そこで次第に、神さまの前で正しく生きた人は必ず復活するという信仰の理解が生まれていきました。

11節に「主からそれらを再びいただける」とあります。古代ギリシア思想では靈魂の不滅という考えがありました。しかし、当時のユダヤ教に広まりつつあった復活の信仰は体がよみがえるというものです。これは14節にも見られます。「死に渡されようとも、神が再び立ち上がらせてくださるという希望」。「立ち上がらせてくださる」が復活を意味します。

第二朗読の『テサロニケの信徒への手紙二』は、パウロが記したと主張する人々もいますが、一般的にはパウロの思想を受け継いだ人によって書かれたと理解されています。

今日の朗読の箇所直前に「あたかも、わたしたちが受けた靈感、わたしたちの説教や手紙によるものであるかのように「主の日はすでに来ている」と言われるのを耳にして、すぐに理性を失ったり動揺したり、うろたえたりしないでください」(2章2節 フランシスコ会訳)とあります。「主の日」に関する誤解がテサロニケの教会にありました。そこで主キリストの来臨について語られています。そして13節からは神さまが選んでくださったことへの感謝が述べられています。

3章1節をフランシスコ会訳で見ると「終わりに、兄弟のみなさん、わたしたちのために祈ってください。あなた方の所と同じように、主の言葉が速やかに駆け巡り、たたえられるように」とあります。「駆け巡り、たたえられる」は「走って賞賛される」の意味だそうです。パウロは時々運動競技から着想を得た比喻を使います(1コリ9章24節参照)。これもその一つかもしれません。また、『イザヤ書』に見られるよい知らせをもたらす伝令の意味もここに含まれているのかもしれませんが(ロマ10章15節参照。イザ52章7節参照)。

福音朗読ですが、イエスさまのエルサレムへの旅の終わりに「ザアカイの回心」の出来事がありました(19章1-10節)。そして、たとえ話を使ってイエスさまは、神の国を待ち望む生き方をしました(「預けた金の喩え」11-27節)。そして、イエスさまはエルサレムに入城します(28-40節)。人々は歓喜してイエスさまを迎えますが、イエスさま自身はエルサレムの街を眺めて嘆き(41-44節)、神殿で商売している人々を追い出します(47-48節)。人々はイエスさまの言葉に喜んで耳を傾けますが、祭司長や律法学者はイエスに論争を挑みます(20章1-8節)。イエスさまは、それをうまくかわして、彼らを挑発するように「悪い小作人の喩え」を語ります(9-19節)。さらに彼らはイエスさまの言葉じりを捉えようと「納税についての問答」に挑みます(20-26節)。そして今度は、サドカイ派との論争が起こります。それが今日の福音朗読の箇所です。

27節の「サドカイ派」について知りましょう。サドカイ派とは、長老、祭司長といった最高法院のメンバーたちが属していた貴族階級を中心としたグループのことです。彼らは自分たちの立場を守り、彼らによる支配体制を維持しようとしていました。『モーセ五書』(『創世記』、『出エジプト記』、『レビ記』、『民数記』、『申命記』)のみを認め、聖書の他の文書を認めませんでした。律法が記されている『モーセ五書』を、自分たちが生きている時代に適応しての理解はしませんでした。ですから、当時、一般に広まっていた世の終わりについての考え方や最後の審判についてのヴィジョンは認めませんでしたし、当然、死者の復活についても否定的だったのです。彼らはいわば律法を第一と考えていました。しかし、律法の遵守よりも、律法を祭り上げるような態度でした。現世的な宗教貴族と考えたらよいでしょう。

サドカイ派の人々がイエスさまに向けた論争は、本当のことを知りたいという純粋な疑問に基づくものではないでしょう。むしろ復活について愚かしいものであることを示そうとするための問いかけです。彼らはこの世の人間関係で復活を眺めているのです。

38節の「生きている者の神」は印象的です。

アブラハム、イサク、ヤコブは「死人たちから起き上がり」、すなわち復活して、今も生きているのだ。当然、復活はあるのだとイエスさまは主張したいのです。

同じ38節の「すべての人は、神によって生きている」にこだわってみます。口語訳聖書の古い版で見ると「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生きるものだからである」とあります。「神に生きる」という表現は何か日本語として落ち着かない印象があります。新共同訳は「神によって生きる」となっていますが、確かにギリシア語原文で読んでみると「彼〔神〕に生きる」とも訳せます。「神によって生きる」は「神のおかげで生きる」の意味で理解したらよいでしょう。「神に生きる」は「神に対して生きる」の意味です。つまり、神さまから見て、神さまにとって生きているかどうかが問われているのです。神さまがわたしたちをご覧になって「お前、生きているね」と言ってくださるとき、わたしたちは生きていることになります。神さまとの関わりあいの中で人は生きるのです。「放蕩息子のたとえ」(15章11-32節)で父親は「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」と言います(32節)。肉体的にはこの息子は死んでいたわけではありません。しかし、父親にとって関わりを拒絶して、「いなくなっていた」のは「死んでいた」ことに等しいのです。神さまも同じです。神さまにとっては、御自分に対して生きている者かどうか大切なのです。アブラハムもイサクも、そしてヤコブも神さまと共に歩んだ人々でした。「神にとって」生きた人々だったのです。この三人の側から考えると、三人とも紆余曲折はありながらも最終的に「神によって生きる」ことを貫いたのです。そのような人たちは、たとえ地上の肉体的な生命が失われても、人間の目には死んだ者に見えたとしても、神さまにとっては生きている者なのです。神さまにとって生きている者は、今もなお生きている者なのです。